

國學院大學學術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウエン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション5

神道古典と言語学のネットワーク形成

ジョン・ベンテリー

アメリカ 北イリノイ大学准教授



【司会（ナカイ）】　これから、第5セッションを始めさせていただきます。

今度のスピーカーはジョン・ベンテリー氏です。ベンテリー氏は、日本語言語学を専門に、祝詞についての博士論文を書かれ、ハワイ大学から学位を授与されました。専門は歴史言語学、特に飛鳥、奈良時代の言語学と琉球諸語関連です。そしてつい最近、本をオランダの出版社から出されました。『先代旧事本紀』についての研究です。

発題

ジョン・ベンテリー

【ベンテリー】　今、紹介をいただきましたベンテリーです。このような貴重なプログラムに何度か参加できて大変うれしく思い、深く感謝しています。しかし、こういう貴重な機会は、実際、あまりないのが現状です。神道学、歴史、人類学などの分野に、言語学が価値の高い貢献ができるにもかかわらず、学際的分野において、言語学は第一線から退いて、単なる見物人として見ている場合が意外に多いです。それはおそらくほかの分野の専門家に言語学の根本的な役割がよく理解されていないからではないかと思います。

私は、さっき紹介がありましたように、『先代旧事本紀』を20年近く研究し、その英訳を出版社に出したとき、審査員の1人に、神話学の分野に言語学者の参加が少ないことを、今までいつも憂慮していましたというコメントがありました。

日本語学とほかの分野の隔たりが大きいのは、欧米に特徴的な問題なのかもしれません。日本には宮良当壮や服部四郎といった素晴らしい言語学者がいたことに感謝しています。彼らの大切な業績を通して、私は今までの研究ができました。神道学のあらゆる分野に、これからも言語学者の多大なる活躍があることを願っています。

ここで世界中の日本語言語学者の要望に応えるために、まず言語学の貢献について少し触れてみたいと思います。

延喜式におさめられている祝詞は、神道学にとって非常に大切なものであることは言うまでもありません。しかし、これが平安時代に編纂された延喜式に入っているため、祝詞自体が平安時代のものであるという誤った見方をされることが時々あります。『神道事典』には、これらの延喜式にある祝詞は、弘仁11年（820年）4月奏進の弘仁式巻六におさめられている祝詞を、ほぼそのまま継承したものと推定されているとあります。しかし、平安時代よりはるかに古い言葉遣いなどがあるので、実際は、それ以前の時代にさかのぼるものと確定できます。そして、それは言語学を使うことによって、ある程度、その年代を推定すること可能です。

それでは、まず祝詞の仮名遣いの正確さを調べることから始めましょう。次の表（表4）を見ていただきたいのですが。これは祝詞の万葉仮名の分析をした表です。ここで甲と乙を表にして、その綴りが正しいかどうかを表にしました。ごらんのとおり、音仮名の835

甲類	正	誤	乙類	正	誤
キ甲	41	1	キ乙	11	0
ケ甲	2	1	ケ乙	19	0
コ甲	3	0	コ乙	9	0
ソ甲	2	0	ソ乙	8	0
ト甲	11	0	ト乙	161	0
ノ甲	0	0	ノ乙	360	0
ヒ甲	52	0	ヒ乙	4	2
ヘ甲	12	3	ヘ乙	32	0
ミ甲	23	1	ミ乙	0	0
メ甲	13	0	メ乙	7	0
モ甲	4	3	モ乙	21	0
ヨ甲	1	0	ヨ乙	1	4
ロ甲	21	0	ロ乙	2	0

表4 祝詞の仮名遣い

甲類	正	誤	乙類	正	誤
キ甲	36	0	キ乙	11	0
ケ甲	8	0	ケ乙	12	0
コ甲	5	0	コ乙	20	0
ソ甲	6	2	ソ乙	1	0
ト甲	1	0	ト乙	33	1
ノ甲	1	0	ノ乙	70	3
ヒ甲	28	0	ヒ乙	6	0
ヘ甲	5	1	ヘ乙	11	0
ミ甲	48	0	ミ乙	1	0
メ甲	0	2	メ乙	0	0
モ甲	2	2	モ乙	26	18
ヨ甲	1	0	ヨ乙	26	3
ロ甲	1	0	ロ乙	9	5

表5 「歌経標式」の仮名遣い

例のうち、820 例が正確であり、仮名遣いの厳格さは 98.2%にのびります。格助詞の「ト」と「ノ」の例が多数であるため、統計重率の心配はありますが、格助詞「ト」と「ノ」を除いても、その仮名の厳格さの割合は、いまだ 299:15、つまり 95%に保たれます。ただ、これは一次的なデータであるので、皆さんはまだその重要さを把握できないかもしれません。

では、今度は奈良時代後期に編纂された藤原浜成の歌謡集『歌経標式』の仮名遣いと対比してみたいと思います。ここでは『歌経標式』の万葉仮名を全く同じように表にしています（表5）。『歌経標式』の仮名遣いの正確さも 368:37、つまり 91%と高いことがわかります。飛鳥時代末期から始まったと推定されている甲乙融合が『歌経標式』には既にあらわれていることから、祝詞の仮名遣いは奈良時代以前のものでなければなりません。祝詞が平安時代以前のものであれば、その言葉遣い、文法などは平安時代のもものと異なるのは当然です。

まだ、あまりぴんとこないかもしれませんが、漢字などは、奈良時代以前から平安、江戸時代、現在に至るまで継続的に使われているので、私たちにとって、言語に起こった激しい変化は認識しにくいものになっています。奈良時代の日本語と平安時代の日本語は、イギリスにたとえると、アングロサクソンという古英語と中世英語と同様、かなり違います。その点から学者は、祝詞を分析するとき、平安時代の日本語を避けて、飛鳥時代、またそれ以前の時代を研究の土台にしなければなりません。多くの神道学者には、この点が理解されているでしょうが、宗教学会、文学学会、歴史学会などにおいては、飛鳥、奈良時代の古代日本語と平安時代以降の中世日本語がほぼ同一の言語であったという的外れな

考え方が根強く残っています。古代日本語の音韻、語彙、形態、シンタックスなどは、中世日本語のそれらと大きく異なり、古代日本語と中世日本語に共通するところはあっても、意味、使い方などが異なることを考慮すれば、この2つの時代の言語を別々に考える必要があるのは明白だと思います。

我々の学生に強調したいことは、祝詞にある言語学的な情報は、非常に古い時代から来たもので、分析・研究を行うときに、飛鳥、奈良時代以降の言語学的、文化的な情報をもとにして、分析・研究をしないでほしいということです。

そこで最初の要望ですが、井上先生から、この話を紹介されたときに、一応、全世界の言語学会を代表するものとして、自分の勝手な要望を言うよりも、アメリカとイギリスの史的言語学者に、どういう要望があるのかを一応聞いてみました。今から私が提案する要望は、僕独自のものではなく、何人かの言語学者の共通したところのものです。

このように古代日本の文化、宗教などを研究している学者が、国際日本語言語学者たちの研究などを検索し、研究し、話し合う機会をより持ちやすくするために、何らかの形で、電子フォーラムを設けていただきたいと思います。さっきグリーン先生の話にもありましたが、メーリングリストのことでは、いろいろ質問も出ましたので、私も大変賛成しますが、この電子フォーラムは、メーリングリストのような無限無題なものではなくて、決まったテーマや差し迫った問題などに限定したほうがよいかと思います。また、フォーラムには管理者をつけることも大切な条件の1つでしょう。

どのような言語学的分野の学者の参加を希望するかといいますと、いろいろあるのですが、史的言語学者、方言学者、琉球語の言語学者、日本語や琉球語のアクセントを専門にする学者などがいいと思います。当然、ほかの分野の学者の参加をぜひ歓迎したいと思います。しかし、日本語学をテーマにするフォーラムですので、言語学をさまざまな角度で研究する学者の参加を呼びかけるのがポイントとなります。このような専門家が集まり、現時点の古代日本語の研究をより細かく分析し、より深く理解できるように話し合い、研究の成果を分かち合い、討論できる国際的な場がどうしても必要だと思います。

数カ月前に、私はアメリカの著名な大学に在籍する1人の日本語・朝鮮語の史的言語学者と話をしていました。すると、彼は次のような驚くべきことを漏らしました。外国の学者と日本の国語学者とのコミュニケーションが、ごくわずかな国語学者の手によってコントロールされているのは残念なことだ、というコメントです。なぜこのような状態であるのかはよくわかりませんが、このシンポジウムにおいて、この現状を破って、日本語の歴史に国際的な明かりを当ててもらいたいと思います。

もう1つの要望は、言語学に必要な日本の資料の電子化の促進です。去年のシンポジウムで話題にもなったように、著作権の問題はあるでしょうが、ぜひ、この電子化を実現してもらいたいと思います。特に優先的に焦点を当ててほしい資料は、例えば『時代別国語大辞典』や『大日本国語辞典』のようなものです。それらのデジタル化が実現できれば、非常に喜ばしいことです。また琉球大学の琉球語音声データベースにならって、日本全国の方言や日本全国のアクセントといったデータベースを公表すれば、日本語の歴史に関す

る研究は大きく促進すると思います。

ここでちょっと琉球大学のデータベース (<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/>) を紹介いたします (図5)。今は、琉球地方には4つの言語があります。ここにはその代表的なものを幾つか挙げます。例えば今帰仁のほうに行きますと、今帰仁は沖縄本島の北部にあるところで、こういうふうに検索できる場所があります。例えば、「キ」を今帰仁ではどう発音されているかを聞きたいとすれば、こういうふうに青と赤の音声の記号がありますね。たしか、青は男性、赤は女性の声が出てきます。そこで名前の声を聞くことができます。こういうようなデータベースで、もし日本全国のアクセントがあれば、私みたいな言語学者の研究が非常に弾んでいくと思います。



図5 琉球大学・琉球語音声データベースのホームページ

先ほどの要望と同様、このシンポジウムでは、日本語を神道の歴史、儀式、言葉、精神を伝達する手段として、多角的にとらえていただきたいのです。そして、この作業をなし遂げるためには、学際的な面や、国際的な面からいろいろな人の力を合わせて、研究を分かち合うのが賢明ではないかと思います。

ここで、私のような史的言語学者の研究を妨げている問題を解決するために、どんな研究が必要なのかを簡単に紹介したいと思います。時間の関係で2つだけ紹介することになります。

1つは方言学。特に九州、沖縄あたりの諸言語の起源の研究を押し進めることが非常に

大切だと思います。ごく当たり前のことですが、古代日本語をより鮮明に理解できれば、古代神道の言葉もよりはっきりと把握できます。多くの日本の学者は、琉球諸語は奈良時代の日本語から分離したと仮定しています。しかし、最近の研究ですが、ハワイ大学のレオン・セラフィム (Leon Serafim) 博士の首里方言の研究によって、この仮定が誤っていることが明らかにになってきました。どうしてそういうことが言えるかといえば、動詞の活用形を見れば、よくわかると思います。次の表を見ていただきたいと思います (表 6)。

意味	現首里語	首里祖語	古代日本語	日本語祖語
過ぎる	siʒijuN	*sugi-	sugiy- 須疑 上二段	*sugu-
起きる	?ukijuN	*oke- 中二段	okiy- 於己 上二段	*okoy-
浮かぶ	?ukijuN	*uke- 中二段	ukey- 宇気	*ukay-

表 6 史的日本語学のチャレンジ

ここで3つの動詞を列記しています。「過ぎる」「起きる」「浮かぶ」です。ここで現在の首里語、そして、ここは首里祖語、つまりデータに基づいて再構築すれば、こうなるのですね。そして、ここはいわゆる万葉仮名で表記されている同じ動詞の例なのです。そして、日本語祖語を再構築すれば、こうなるのですね。この表でわかるように、日本語の「起きる」という上二段動詞は、首里語では上二段ではなく、中二段になっています。一般的に中二段という動詞がないことから、琉球語から奈良時代の日本語から分離されたことはあり得ないことになります。それでは、奈良時代の大和あたりの言語から分離したものでないならば、琉球諸語は何の言語から分離したものでしょうか。そこで九州北東の方言を見ると、「起きる」という動詞は、oke-、つまり首里祖語の oke- と全く同じことになっています。すなわち、セラフィム博士の結論は、琉球諸語は九州の言語から分離したということになります。このように日本の方言学者と欧米の日本語学者が協力すれば、さまざまなすばらしい発見が、より早く見出されると思います。

もう一つの例は、あまり注目されていない日本語、琉球語のアクセントと日本語の歴史とのつながりです。1つの重要な例を紹介しておきましょう。欧米において日本語の史的言語学の父と言われているサムエル・マーチン (Samuel Martin) 博士は、日本語の単音節のアクセントについて、次のように結論づけています。現代日本方言の単音節の名詞には3種類のアクセントの再構築を必要とするけれども、『名義抄』のアクセントを参照して、また日本語の構造的なデータを考慮すれば、上代日本語には4種類のアクセントが存在したことがはっきりする、とあります。琉球大学の島袋盛世教授は、このアクセント起源史の研究を行い、非常に興味深い結果を発表しています。彼の『日本語・琉球語のアクセント史』という本が今年末ごろ出版される予定ですが、それによると、上代日本語の単音節の言葉は、もともと2種類が存在したとあります。その一つが、モーラが1つであるもので、現在の1音節の名詞と変わらないものでありますが、もう一つは琉球語と同様、単音

節の名詞の母音が長くなり、2モーラになっていったというものです。後者は例えば「名前」の「ナ」が「ナア」と伸ばされていて、2音節になっているようなものです。しかし、私の独自の研究の観点からすれば、母音が伸ばされている単音節の名詞は、おそらく二次的な現象ではないかと推定します。すなわち、日本語祖語の時代にはCVC（子音・母音・子音）という閉音節、すなわち子音で終わっていたものだとは推測しています。しかし、どうい子音があったのか、どういう音韻変則によって、それが弱くなり、後の時代に省略されたかは、現時点では不明です。私の勝手な憶測ですが、おそらくこれは喉頭音のような子音ではないかと思ひます。それはどういう意味かといへば、現在の日本語には喉頭音が存在しないわけではあります。ですから、再構築しても喉頭音が出てこないというのは事実ですので、ほかのデータを使って、どうやってこれが見出されるかが1つのポイントです。これが事実であれば、この形態素末の子音が無音声化して、閉音節が時代の経過とともに脱落して、単音節になったという考えです。その証拠として、『魏志倭人伝』にある地名や官名の多くは、開音節ではありますが、中には閉音節のものもあります。

倭人伝の表記	後期漢時代の再構築	種類	備 考
一支	*ʔit-kie	地名	現在の壱岐嶋
末盧	*mat-lo	地名	松浦か。
己百支	*ki ^ʔ -pak-kie	地名	
卑彌弓呼	*pie-mie-kuy-xo	称号	「卑弥呼」との関係が不明
難升米	*nan-ciŋ-me ^ʔ	人名	
掖邪狗	*jak-ja-kou ^ʔ	人名	
載斯烏越	*tse ^ʔ -sie-ʔo-wat	人名	
泄謨觚	*siat-mo-kuo	官名	
彌馬升	*mie-ma ^ʔ -ciŋ	官名	
彌馬獲支	*mie-ma ^ʔ -yuek-kie	官名	

表7 魏志倭人伝とのデータ

次の表を見ていただきたいのですが、これがその例です（表7）。閉音節になっているものは赤字で書いてあります。『魏志倭人伝』を研究してきたこれまでの多くの学者の間では、さまざまな説明が試みられていますが、それらはすべて、この中国語の表記にはっきりとあらわれている閉音節の現象を無視あるいは軽視しています。倭人の言葉に閉音節の言葉が存在したと言った学者は、私が知っている限りでは、まだいません。そこで私はもう一度、その表記をよく見て注意深く分析していただきたいのです。例えば一番気になるのは有名な「壱岐嶋」の「壱岐」なのですね。これはなぜこういうふうになったか。この4つの例は全部、「イキ」で、開音節なのです。開音節なのに、なぜ閉音節で書かれているかということが不思議でたまりません。小谷博泰博士は『上代文学と木簡の研究』という本に、

次のように仮定しています。『魏志倭人伝』に記載された官名、国名、人名などの固有名詞は、倭国において採集・文字化された可能性が大きいのではなかろうか。当時の日本語の音韻を聞き分けるだけの、いわゆるヒアリング能力を持った者の手によって初めて記載されたもののように思われる、とあります。もしこの仮説が事実に近いとすれば、閉音節の存在をどう説明するかが、1つの重要な課題になります。

そういうわけで、古代日本語の前時代の名詞のグループには閉音節があったという可能性を追求して研究していただきたいと思います。これには、ほかの日本の音韻、方言学者の参加をぜひとも歓迎したいと思います。

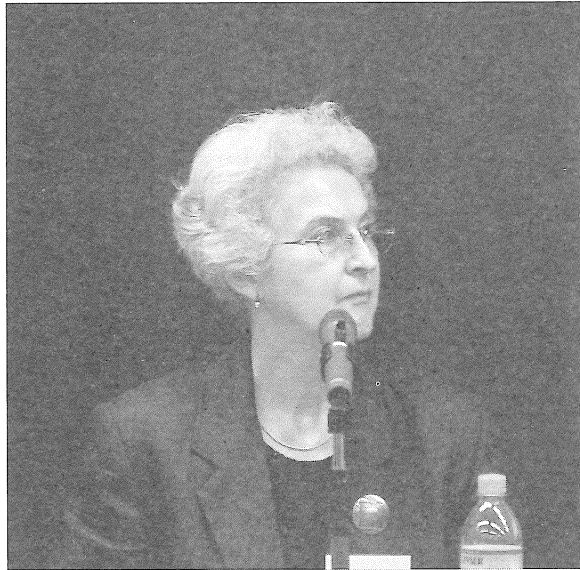
次には、教育面を考えた場合、言語学者ですので、教育といえば、日本語を学ぶと私は考えますので、言語学者に望まれる共同プロジェクトは、学生に正確な日本語を学ぶ機会、すなわち会話だけではなく、日本語を書く機会、古文書を読み、分析する機会などを与えることです。変わった要望に聞こえるかもしれませんが、日本に留学して、日本語をべらべらとしやべることができるようになるだけでは、言語学という観点からすれば、日本語学の勉強になっていません。それではどうすればいいのか。私は、現在の日本社会の国語動向に逆らって、伝統を守り、伝統的な日本語の美しさを留学生に教えてほしいのです。国学院では、それが行われているかも知れませんが、私がハワイ大学の大学院のときに、贅川先生という方が、きれいな敬語を教えてくださいましたのを覚えています。近年の日本の若者の間では、敬語の使い方がかなり墮落してきているように思います。また日本語の先生として一番気に入らないのは、ら抜きです。何でそれが言えないのか、不思議でたまりませんが、1つの要望としては、伝統的なきれいな美しい日本語を保っていただきたいと思います。

最後には、国学院大学を拠点として、どのような形での研究関係を想定できるかというテーマについて、少し触れて終わりたいと思います。この5年間は、非常に有意義な時間であり、さまざまな研究の支援をいただきました。これは井上先生やヘイヴンズ先生をはじめ、そのほかの方々の努力や時間の犠牲のもとに成功したものと思います。これからの研究では、より学際的なグループが形成され、維持されることを望みます。さまざまな分野ごとに分けるという提案はあろうかと思いますが、植物学にたとえると他家受粉、すなわち、ある植物の花の柱頭が、同じ種類の植物のほかの個体の花粉によって受粉することで、その実を結ぶように、言語学においても、さまざまな分野の専門家が集まり、生産的な話し合いをすることで、研究の実を結び、神道学が発展することを願いたいと思います。

以上です。

質疑応答

【司会（ナカイ）】 ベンテリー氏のご発表の中で、最初、言語学の役割、研究に対してどういう役割を果たすかと。そして、それからいくつかの要望を話されまして、それは古典の電子化、もう1つ、正確な日本語を勉強する機会をどういうふうにつくるか。そして最後に、他家受粉的な研究環境を与えることを設定しました。これから、質疑に入りたいと思いますが、どなたからでもどうぞ。



【遠藤】 国学院大学の遠藤です。ちょっと技術的なというか、そのような話をお伺いしたいのですが、先生のほうで電子フォーラムについてご希望を挙げられたのですが、この電子フォーラムを設定するとき、例えば、まずは言語学のほうに分野を特化したものを用意するというか、そういうものがあつたほうが便利なのか。それとも、広く神道というようなテーマでフォーラムをつくったほうが、最後のところにありましたように、いろいろな分野の交流という意味でいいのか。私ども国学院大学のほうでも、いろいろな形で計画を立てると思うのですが、その中で優先順序とか、仕事のやりよいほうというものを考えて順序をつけていかなければいけないと思うのですが、実際、先生が作業をされている中で、どちらが必要としておられるかということをお教えいただければと思います。

【ベンテリー】 本音は、言語学が中心的なフォーラムだったらいいのですが、それを国学院大学に要求することは卑怯だとは思いますが、でも、例えば神道を議論する場として、言語学という枠組みがあるとすれば、それでも大変歓迎したいと思います。今まで、言語学というフォーラムが存在しないのは、言語学者の責任だと思うのですよ。正直に言つて。

【井上】 ベンテリーさんのお話は非常に専門のトップレベルのお話で、日本語の古代と中世の違いとか、閉音節で終わるといふ問題とか、非常におもしろいのですが、おそらく神道を研究する人にとっては、それが神道研究のどこに大きく発想法を変えるような要求になっているかどうかというところにあると思うのです。それが大きいと、やはりフォーラムの中に言語学的なものを、神道研究のネットワークをつくるときに、どうしても、これを入れなければということになると思うのです。今日のお話で、ちょっとはわかったのですが、それが例えば神道古典、万葉集とか、いろいろなものを研究していく上で、従来とはこういう点で違っていくのだと。ベンテリー先生の研究成果を入れると、こういうところで違っていくのだというような見通しで結構ですから、そういうことを幾つか教えていただくと、神道研究との結びつきというのが太くなると思うのですが。

【ベンテリー】 簡単に言いますと、言語学者ですので、例えば古代神道の古典に出てくる言葉の由来とか、意味とかですね。例えば「神々」の「カミ」の語源はどうであるかは、今でもわかっていないのです。一応、「上」の「カミ」ではないというのは事実なのですが、それ以外の語源はまだはっきりしないので、もし比較言語学とか、史的言語学の研究によって、それがはっきりわかれば、おそらく日本の神道と例えば韓国の宗教とか、その結びつきがもうちょっとはっきりしてくるかもしれません。そういうようなものが想定されると思うのです。

【井上】 閉音節というのは、韓国語の問題とはつながりますか。

【ベンテリー】 はい。つながると思います。90年代までは、多くの日本語の言語学者は、日本語と朝鮮語は姉妹同士であるという説をよく唱えられていたのですが、最近、多くの言語学者はそれをやめて、結局、日本語と朝鮮語は全然関係がないのではないかという説が出てきているのです。これは時代によって循環するような感じですから、僕はどっちになっているかは、まだ決まっていないと思います。僕はまだ日本語と琉球語の言語学を一応勉強して、いつかはその情報が十分に出てくれば、朝鮮語とどう関係かが言えるだろうと思うのですが、僕は日本語と琉球語をよりわかれば、隣の国々の言語とのつながりもよく見えてくると信じています。

【井上】 魯成煥さんにもちょっとご意見をいただけたらありがたいと思うのですが、日本では時々、今のように関係ないというのと、万葉集は韓国語で書かれているとかというような話が出たりして、極端なのが出るのです。あまりに極端なことを言うために、無視されてしまうということになるのです。でも普通に考えて、古代の交流は、これだけあったわけですから、神道にかかわるような現象とか歴史の形成に、語彙ももちろん影響があったでしょう。韓国も漢字文化圏ですから。それが史的言語学という立場を導入することで、今の現状から何か突破口というのでしょうか、可能性があるものなのかどうか。その辺は、まだこれからのことですからわからないのですが、全くの与太話というか、変な話ではなくて、比較がきっちりとなされると、今までとは違う段階の古典の読み方が出る可能性について、ちょっとご意見をいただくと、いろいろなことを考える上での参考になるのですが。

【魯】 私は言語学者ではないのでよくわからないのですが、今は韓国では万葉集が古代韓国語で書いたという話は話題にはなっておりません。一時期、80年代ごろに、随筆家が、具体的な名前は挙げられませんが、リさんという女性の方が、国会議員もやりましたけれども、彼女がどういうわけか、万葉集に突然関心を持ち始めて、書いたのです。そのとき、韓国のナショナリズムとかなり結びついて大ヒットしました。その前にキム・シヨウという先生が、京城帝国大学の朝鮮語学科の出身で、言語学者として、例えば渡来系の人々が仏像とか、そういうものをつくったならば、新羅とか百済人だったら、それぞれの漢字の使い方で、自分の言葉で何か書いただろうと。そういう発想で研究していったのですが、残念ながら、キム・シヨウの学問はあまり継承されなくて、随筆家が書いた万葉集のこととか、それが一般にかなり広がっていったのです。それは日本研究者の間では、彼女の理論はあまり信用もない、評判にならないというか、無視されているところなのですが、一般人の偏った方々のファンクラブみたいなこともできて頑張っていたのですが、どうも最近10年前からは、彼女の学説も行方不明になってしまったという決着です。

古代言語における韓国と日本との関係は、まだまだ韓国社会でも高句麗語とか、百済語とか、新羅語とか、そういう言葉がそれぞれあったので、それが全部、復元されていない状況なので、いまだに何だかはっきり言えない状況ではないかと私は個人的に思っています。

【司会（ナカイ）】 はい、どうぞ。

【真田】 埼玉学園大学の真田です。質問というのではなくて、今のベンテリー先生のご発表について簡単な解説といえますか、言語面についてちょっとお話をします。

ベンテリー先生がおっしゃっていた閉音節のことですね。これがなぜ上代の日本語学で進まないかといいますと、やはり日本人はどうしても文字を見て研究するきらいがありますから、どうしてもCV（子音・母音）の呪縛からなかなか逃れられないですね。これがもう少し時代が後になってきますと、例えば1603年にポルトガルの宣教師が来て、日葡辞書を書いて、アルファベット表記で日本語を表記したところで初めて、当時の日本語に母音の脱落があって、子音だけの無声化した音があったということがわかるのですね。それは外の資料から再認識できる。例えば今、私たちが発音しているこの日本語も、例えば「たくさん」なんていう言葉の「く」という音は、だれも「u」の音は実際はほとんど言っていないのですね。それから、「きょうは晴れです」というときの最後の「す」の「u」の音も、これも無声化しています。でも、言語学者を除いて、多くの方々は、それは日本語の表記をすると、必ずその1文字に子音と母音がセットになっているものですから、その呪縛からなかなか抜け出せないのですね。これは古代研究でも同じで、漢字や万葉仮名で書かれた資料を読むときに、どうしてもCVで考えてしまうという傾向があります。

これから逃れるためにはどうするかというと、外の視点が必ず必要になってくるのですね。アジアの、おそらく中国の資料を見て、そこから日本の資料をもう一度見直すと、先生がおっしゃったような後ろに子音がおそらくついていたのだけれども、実際、日本人が発音していたかもしれないけれども、日本人が意識していなかった、意識から落ちてしま

っていたという部分が何か解明されてくるのではないかと思います。

【司会（ナカイ）】 まだ少し時間がありますので、ほかに何かございませんか。

私のほうから一つ。おそらく、私たち、今、真田先生のご発言がありました、ほかの方たちは、私と同じように言語学の知識がないので、どういう質問を出せばいいかをちょっと戸惑っているのではないかと思います、ここでもうちょっと話を広げて、例えば神道についての電子フォーラムをつくってもらいと、例えば言語学者を取り入れるために、どういう仕組みで、ほんとうにみんなが互いに話し合うことができるか。さっきのPMJSの話がありましたが、時々、言語学者の発言も入ってきます。そして大体、そこで私にはチンプンカンプンの討論があります。ですので、おそらく、特に日本の古典の言語学者、海外の言語学者は、かなり数が限られていると思いますので、そして神道研究の研究者も限られていますので、どういうふうに互いに自分の研究をほんとうに高いレベルで話し合うことができるかという問題なのですね。やはりあまりに専門的になりますと、数人しか参加できない。ですが、同時に高いレベルの研究的な視点から話せないといつまらなくなる。ですから、そういう問題について何か言語学者の立場から、どういうふうにもっと広く、互いに参加できる場をつくれるかということですね。

【ベンテリー】 そうですね。核物理学で喩えますと、一般市民にとって、核物理学もチンプンカンプンであるかもしれません。しかし、核業界の努力によって、一般市民は、核物理学の原理や討論の細かいところが分からなくても、現在は核原子力発電所の利点と弱点が理解できると言えるのではないのでしょうか。その努力と同様、私は歴史家・文学者などに歴史言語学の利点と弱点をはっきりと説明したいと思います。今までにこういうような説明がされていない訳ではありませんが、ありますが、ちょっと複雑な経路もありましたので、学際的な効果があまり現れていないのが現状です。

80年代、90年代にあるアメリカ人の有名な日本語の言語学者が活躍しましたが、彼は日本語学をもっと多くの人に、広く知ってもらうつもりだったのでしょうか、結果的にほかの分野の人の目をくらませてしまったと思います。例えばある歴史家が新しい学説を提供して、その学説の中に日本語の歴史などについて記事を出しますと、この先生はすぐ反論を書き、その人の学説を痛烈に批判しがちでしたので、一般の学者は言語学について何も言えないというような違和感が出てきたと思うのです。

私は、1つの目標というか、言語学とほかの分野の架け橋をつくりたいという気持ちが強くあります。それで1つの提案は、快く対話するというか、高慢にならず、非常に人間的になればいいのではないかなと思うのです。言語学者は、今までは何か鼻が高いというか、高慢という問題があったのです。それが正直なところ。僕は別にどうっていうことはない人ですから、ただ、こういう道に入って、言語学を勉強してきたので、私がすべての言語学について知っているわけではないので、フォーラムとしてはいろいろな質問とかを歓迎して、参加を呼びかけることが最初の課題ではないかと思います。80年・90年代を見て、そういうような非常に激しい批判を受けて、いろいろな方が口にしなくなったのを見て、それが非常に残念だと思います。日本語の欧米においての言語学者があまり

結束しないのが、1つの問題だと思うのですよね。どうしてもそれを乗り越えて、もうちょっとグループとして動けるようにしたいと思いますね。

【司会（ナカイ）】 ほかに何かご意見はありませんか。

【平藤】 国学院大学の平藤です。今、ベンテリー先生から、気楽に何でも質問をしていいというようなお話があったと思いますので、ほんとうに基本的なことで教えていただきたいと思います。19世紀にヨーロッパに、インド・ヨーロッパ語族の比較言語学が生まれ、そこから比較宗教学、比較神話学というものが生まれていったという背景があります。その後、言語学はどんどん先に進歩していつてしまいましたが、とにかくもともとは比較言語学、比較宗教学、比較神話学というのは近いところにあったと言われています。

なぜその頃これらの分野が近かったかという、比較言語学が比較の対象とした言葉が、主にリグ・ヴェーダなどに出てくる神々の名前や、宗教、儀礼に関する用語であったからだと思います。つまりその頃は宗教に関する言葉が言語の古い形を残しているという前提に立って、言語の比較を行っていたと思うのですが、以後の研究の状況で、例えばベンテリー先生が日本の古代の言葉と琉球の言葉を比較するときに、例えば祝詞という言葉と琉球語の「ノル」というような、やはり宗教に関係する言葉を比較したほうが比較言語学の上でも有効であるというのは、今も変わらないのでしょうか。それとも、そうでもないのか。ちょっとあまりに基本的なというか、不勉強な質問で失礼なのですが、よろしくお願いします。

【ベンテリー】 比較言語学は、1つの言葉に頼るわけではなくて、グループとして、そのパターンを見るのですね。ですから、1つの言葉に執着して、それでほかの言語と比較して結論づけるのは非常に危険だと思います。というのは、言葉は借用されやすいし、意味も変わるので、もし言語学を使うのなら、言語学+文化とか、ほかの分野のデータを多角的に比較したほうが一番有効ではないかと思います。ですから、学際的な研究が非常に大切だと思います。1つの分野に頼るのは危険だと思います。

【司会（ナカイ）】 ほかに何かご質問は。

では、ほとんど4時ですので、ここで一度、休憩を取らせていただいて、どうもありがとうございました。（拍手）